

生涯学習の場としての公共図書館サービスの在り方 －高齢者の視点から－

関 寄 綾 乃

『ユネスコ公共図書館宣言』等において、図書館はすべての人へ平等に、社会的課題・変化に適応したサービスをすべきであるとされている。高齢化率 28.8%の日本では、孤立感を覚える高齢者が増える課題や、庇護対象から地域社会の主役へと、高齢者像が変化する、といった、社会的変化が起こっている。図書館のサービスの対象の「すべての人」にはもちろん高齢者も含まれ、このような時代の流れに対応したサービスが求められているといえる。そのため、本研究では図書館の高齢者向けサービスを取り上げた。

本研究の目的は、図書館の高齢者向けサービスの中でも催し物に焦点をあて、図書館における位置づけや、それに対する高齢者のニーズを明らかにすることである。図書館の高齢者向けサービスに関する研究から、高齢者が図書館サービスに対して持つニーズを把握することの重要性や、具体的ニーズとして、他者との交流や、主体的な社会参画へのニーズなどを持つことが明らかにされている。しかし、これらのニーズを、大活字本、アウトリーチサービス等の他の高齢者向けサービスよりも満たす可能性が高い「催し物」に関する研究は明らかにされていないためである。

文献調査では、日本の公共図書館における高齢者サービス、また、高齢者を対象とする催し物の位置づけを明らかにした。さらに、高島涼子の定めた催し物の分類を参考に、本研究における分類を新たに定め、その分類のもと催し物の事例を述べた。

質問紙調査では、大和市立図書館で行われる催し物に参加する高齢者を対象として、催し物に対するニーズを調査した。本調査で明らかとなったことは、まず、参加者が楽しいと感じる催し物のテーマ設定の重要性である。この「楽しい」には娯楽や気分転換の意味も含まれるが、高齢者の回答の中には新たな知識を獲得することに対する「楽しい」が見受けられ、ただ生活に役立つことや、ためになる催し物を求めている、というよりも、それによる楽しみを求めていることが明らかとなった。また、マイクを用いる場合は音量を調整することや、講義形式の催し物は話すスピードを遅くすること、さらにはスライドの文字の大きさについても高齢者の見やすい資料作りが求められていることが明らかとなった。

本研究では、催し物に比較的多く参加している高齢者を対象として調査を行ったが、今後は、催し物に参加していない・参加頻度の低い高齢者の視点から、催し物に対するニーズを検討することで、より多くの高齢者の参加が実現できると考えられる。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響を受けにくい、参加者同士が会話できるような形式の催し物に対する高齢者ニーズの検討が必要である。これにより参加者の感想やニーズも今回の結果と異なるものになることが考えられる。

(指導教員 呑海沙織)